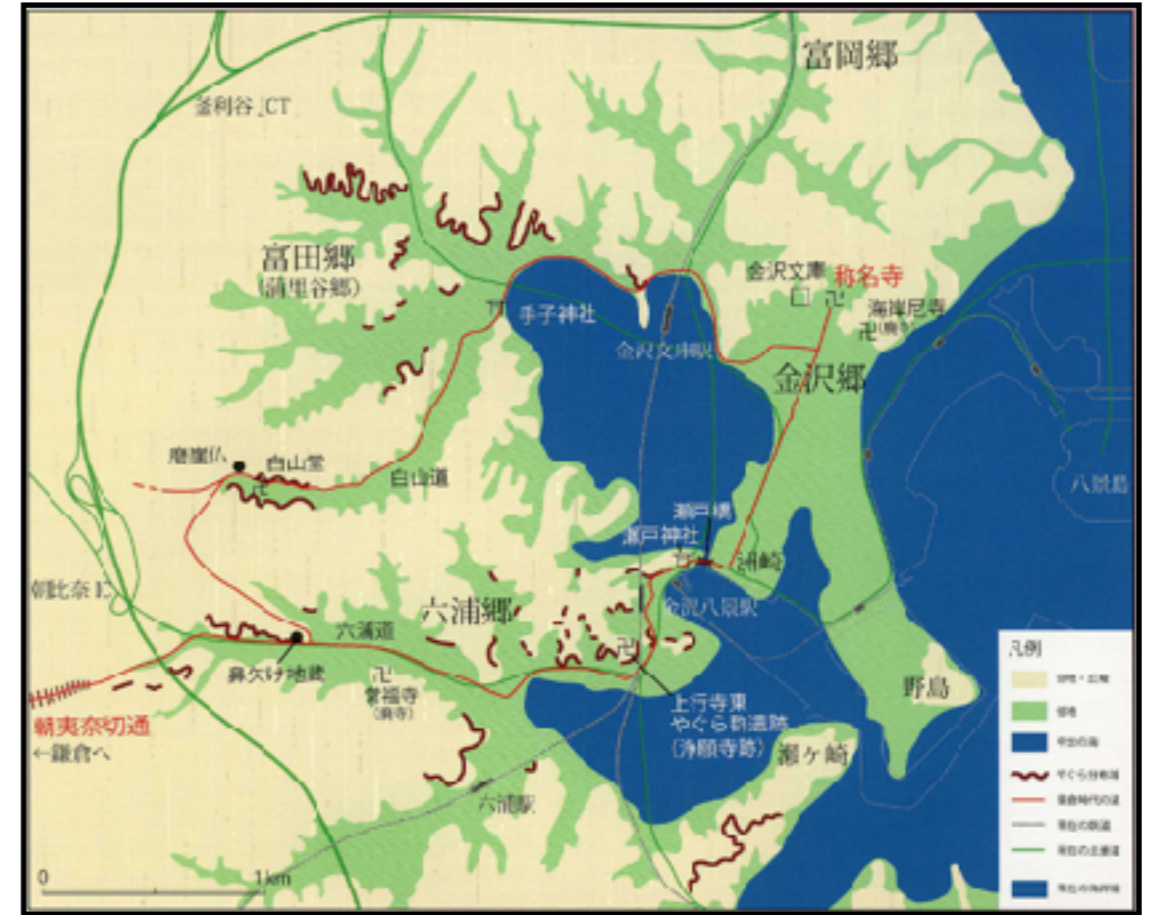


金沢区大道のご紹介



1.六浦道にある大道

金沢八景からのびる古道は、六浦から浦郷を経て浦賀に向かう浦賀道、能見堂を経て東海道の保土ヶ谷宿へ至る金沢道、釜利谷を経て鎌倉に至る白山道、町屋神社を経て野島に至る野島道、六浦湊を通り鎌倉に至る六浦道の五道です。



■ 中世の金沢区 (出典：横浜市ふるさと歴史財団)

大道は鎌倉に至る六浦道にあります。六浦湊は、金沢・六浦は風浪から防ぐ良港だったため、鎌倉幕府の外港として、物流の拠点となりました。六浦や釜利谷で製塩が始まると、朝夷奈切通を通過して、鎌倉に塩が運ばれました。1241 (仁治2) 年に鎌倉幕府が六浦と鎌倉を結ぶ六浦道整備する時に山を切り開いて朝夷奈切通が作られました。



2. 大道の歴史

大道は、貿易で賑わっていた六浦湊、景勝地の金沢八景、鎌倉幕府とも近く、軍事的・経済的にも大変重要な場所でした。大道の歴史は古く、朝夷奈切通が開かれて鎌倉の東の玄関口として早くから開けました。

大道には、1147（久安3）年に大道山・常福寺が開山され、大道一帯がこの寺の領地となり寺分と呼ばれました。常福寺には、1182（弘安5）年北条実時の追善供養に称名寺本尊と共に祀られたと云われている行基作の本尊阿弥陀三尊が祀られていました。1992（平成4）年に神奈川県的重要文化財に指定されました。常福寺は、明治初期に廃寺となったため、宝樹院に管理が移管され、本堂の横の阿弥陀堂に安置されています。

朝比奈峠が開かれてから川村が宿場として栄えました。この辺りには塩田があり、鎌倉幕府に供給する塩を作っていました。また、金沢八景を眺望する場所は、能見堂、金龍院の九覧亭とともに、大道に近い光伝寺の裏山の並木天満宮が有名になりました。近くには、唐船三艘が積荷（青磁の花瓶や香炉・蜀工錦等）を下ろしたところに由来する三艘がありました。

明治には大道村は神奈川県久良岐郡六浦荘村三分字大道となりました。戸数は32戸で昭和初期頃まで変わりませんでした。1936（昭和11）年横浜市へ合併、横浜市磯子区六浦町になり、その後横浜市金沢区六浦町となり、横浜市金沢区大道となりました。令和3年現在は、大道の戸数は1000戸を超えています。

1940（昭和15）年頃から、近郊各地で戦争準備（軍事施設の拡張・移転）が始まり、大道も農地が埋められ、横浜・横須賀海軍の従業員住宅が建て始めました。1944（昭和19）年に六浦原宿線・相武隋道が開通し、大船・厚木へ通じる軍用道路となりました。この年に、大道国民学校（後の大道小学校）が開校されました。



大道



3.大道の地名

昔は、金沢は三分村と呼ばれていて、社家分、平分、寺分に分かれていました。社家分は瀬戸神社の所領で瀬戸から瀬が崎にかけての地域、平分は川・三艘から室の木までで六浦藩の所領、大道は寺分に属しており足利持氏の祈願所である大道山常福寺の所領でした。

1241（仁治2）年に朝夷奈切通しが完成した時に、二間幅（3.6メートル）の大きな広い道が整備され当時としてはかなり大きな道でした。これが「大道」の地名の由来と言われています。また、江戸時代の金沢八景の絵図では大道村近くに大きな橋が描かれていますが、これは現在の大道橋で大橋道とも呼ばれていました。大きい橋のかかる道ということで大道になったという説もあります。

4.大道の関所

大道には、関所がありました。場所は、現在、エールハウスが建っている辺りです。荒廃する金沢文庫の称名寺の再建修理費を捻出するため、三年間に限りに関所が設けられました。人は二文（約60円）、馬は三文（約100円）の通行料を徴収したそうです。人別帳を作って戸籍まで調べるという厳しいことは行わなかったそうです。

5.製塩と刀鍛冶

上行寺前まで砂浜で多くの塩場があり、明治初年まで600年続いていました。また、侍従川の清流と豊富な水に恵まれ、良質の美味しい米が採れました。金沢各地では、釜利谷など鎌倉武士の鎧・武具などの生産が行われていましたが、大道にも侍従川で良い砂鉄がとれたことから刀鍛冶が住みつき、高宗某という刀鍛冶が住んでいました。「高宗」という地名でしたが、現在は、高舟台になっています。「たかぶね」とも発音していたため高舟という漢字をあてたものと思われる

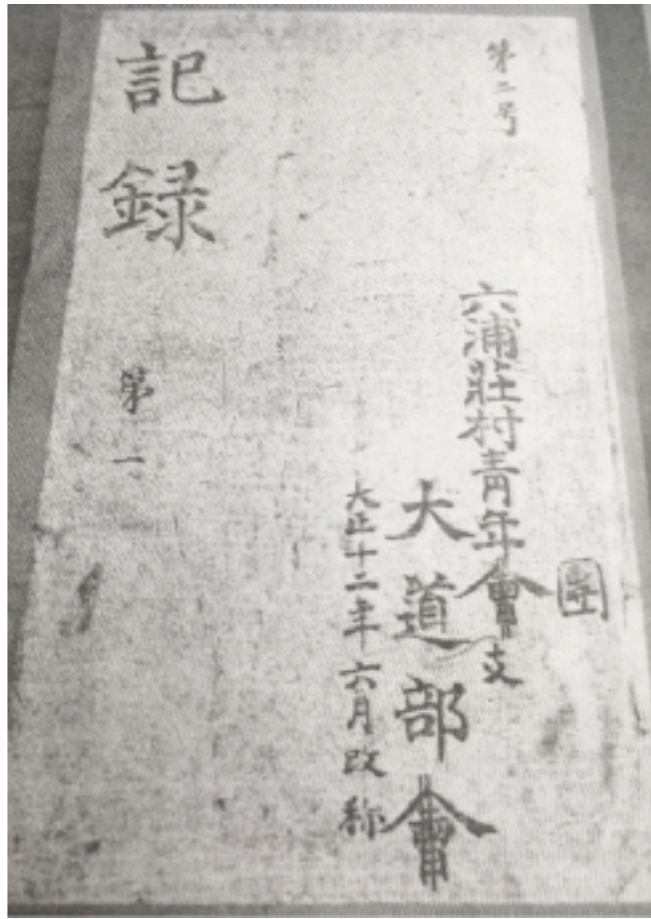


6. 大道の屋根無人

大道の戸数は32戸で、その殆どが茅葺屋根の家でした。村では茅場を所有し、各戸の屋根葺替えを行っていました。毎年、1戸ずつ屋根替えを行いました。茅葺屋根の交換の時期である約30年目で一回りするというものでした。この行事を長く存続するため、「屋根無尽」が行われていました。一定の掛金を拠出し、屋根替えの費用に充てていました。茅葺屋根は、現在は、大道には一軒も残って居ませんが屋根無尽は、村人の親睦目的で昭和まで続いていました。自治会の旅行会などに変化し、現在は屋根無尽は行われていません。

7. 大道の青年会

大道の青年会は大道に住む32戸の長男は、必ず入会することに決まっておき、尋常高等小学校を卒業すると直ちに入会しました。その会では教養の向上を図ることが目的で、それぞれ自由なテーマで意見を発表しました。青年会は教養だけでなく、青年会主催の家族慰安会も年一回行われました。内容は落語・講談あるいはハーモニカなどによる演芸が行われ、家族が一夜を楽しんだものでした。青年会の活動を通して、大道から努力して立身出世された多くの方々が居られました。小泉純一郎元総理のお祖父さんの小泉又次郎さんもその1人でした。



8. 大道の地理

大道は、山に囲まれた盆地のようなところでした。中央に侍従川が流れていて田園が広がっていました。山に囲まれた谷戸という場所があり、そこに住居を構えていました。和田の谷戸、杉の谷戸、大水の谷戸、堰の谷戸、かくらの谷戸、高宗の谷戸、脇の谷戸、大谷戸などの谷戸があります。

宝樹院の裏に「堂山」という山があり、「そこ免」と呼ばれている横穴が掘ってあります。関所で捕らえた罪人を収監した場所と言われています。和田氏や杉氏が住んでいた和田の谷戸、杉の谷戸、お神楽をやっていたかくらの谷戸、刀鍛冶の高宗が住んでいた高宗の谷戸、奉納相撲をやっていた「すもう免」などの当時の生活が分かる地名も残っています。ドンド橋というどんど焼きをした場所もあったようです。

ひょうたん池や大池など、田圃に水を供給するための池もあったようです。

三猿（見猿、聞か猿、言わ猿）が彫ってある「お庚申様」や稲荷様は今でも残っています。



9.大道の名所、遺物、行事

① 宝樹院

元々は、高照寺というお寺で、三艘にありましたが火災に遭い、1650（慶安3）年に、現在の場所に移転しました。小泉純一郎元総理大臣の祖父の小泉又次郎氏(浜口内閣で逓信大臣)、父の純也氏(防衛庁長官)の菩提寺です。宝樹院が移転する前の室町時代に、この場所に称名寺末寺の常福寺(1147年開山)という寺がありました。本尊として祀られていた阿弥陀様が、北条実時の追善供養に称名寺本尊と並べ置かれた記録があり、丸みを帯びた強い肩や痩せ気味の体つき等、平安末期の造像の特色があり、神奈川県的重要文化財に指定されました。



② 山王神社

高宗の谷戸左側の階段を上り詰めると小さな社殿があります。境内からは大道村から朝比奈村にかけての緑園を、眼下に眺められました。近くを流れる侍従川に架かる橋を「山王橋」と呼ぶのは、橋から神社までの道が広々とした大道耕地を貫く山王神社への参道だったからです。猿田彦命を祭神に勧請、境内は約40坪。村の氏神様として崇められていました。地元民から山王様と呼ばれ、稚児初宮参り、七五三祝、10月初旬の鎮守祭りなど、多くの村人が参拝しました。



⑦



③ 六浦大道やぐら群

大道には貴重なやぐら群が残っています。やぐらは鎌倉時代の武士のお墓で、金沢区、鎌倉、逗子にはたくさん残っています。調査の結果、総数で15基のやぐらが確認され、内部や周辺からは、多量の五輪塔、宝篋印塔などの石塔や板碑あるいは、かわらけと呼ばれる土器などとともに多量の人骨も出土しています。この他、4ヶ所の石切りの遺構ややぐらを転用した後世の遺構なども発見されています。



④ 大道のお庚申様

大道のお庚申様です。青面金剛尊と書いてあります。1795（寛政七）年正月八日と刻まれています。今から225年前に作られたものです。青面金剛尊は、庚申講の本尊として知られ、三尸（さんし）を押さえる神と言われています。三尸が活動するとされる庚申の日（六十日に一度）の夜は、眠ってはならないとされ、庚申の日の夜は人々が集まって、徹夜で過ごすという「庚申講」の風習があったそうです。見猿、聞か猿、言わ猿の三猿が彫られています。



⑤ 大道のお稲荷さん（2月21日）

大道には、お稲荷さんがいます。正一位白狐稲荷大明神という額がかかっています。狐、龍、獅子の彫刻がみごとです。灯籠があり、建立年が書いてありますが、判読できません。



⑥ 大道のお祭り「天王祭」

天王祭は無病息災、五穀豊穰を祈るお祭りとして数百年前から行われています。現在では7月7日から14日に近い日曜日を選んで執行していますが、かつては、7月7日から7月14日の8日間にわたって行われていました。この祭りは、本来、氏子の惣百姓（そうびやくしょう）を中心とする民間行事としての夏祭りでした。六浦町の中で、瀬戸、六浦、川、大道、三艘の五ヶ町を中心として行われたもので、祭りの触れ元は川の村役があたっていました。この5ヶ町と別に瀬ヶ崎、室の木の2ヶ町においても同じ祭りが行われていました。



⑦ 大道の屋台とお神輿と獅子頭

大道には昔から伝わる屋台（山車）やお神輿、獅子頭があります。屋台には獅子や鳳凰の彫刻が施されています。作者は「安房の三名工」と並び称される後藤利兵衛です。後藤利兵衛は1815（文化12）年、安房（あわ）国朝夷（あさい）郡北朝夷村（現在の千葉県千倉町北朝夷）の生まれで、1902（明治35）年に88歳で亡くなりました。千葉や横須賀、金沢に多くの作品を残しています。



⑧ 侍従川

侍従川は、朝比奈峠を水源とし大道を縦断し、川、三艘を通り平潟湾に注ぐ清流です。川の名は、中世から伝わる照手姫の乳母侍従が光傳寺前の川に身を投げたことから侍従川と呼ばれるようになったという照手姫の故事に由来します。侍従川の水は絶えたことがなく、田んぼに水を引いたり、生活用水に使われていました。うねうねと曲がりくねり、自然の川そのままの姿をしており、両側は大名竹が生い茂っていました。二級河川で、河川延長は1.96Km、流域面積は4.40km²です。



⑨ 照手姫の故事

大道の近くには、600年以上前の照手姫の伝説が残っています。照手姫は武士の娘でしたが、妓女となり藤沢の盗賊の首領の横山太郎の屋敷に仕えていました。関東管領の足利持氏に謀反の嫌疑をかけられた小栗判官とその主従の殺害計画を事前に知り、これを判官に伝えました。宴席で毒入り酒を飲まされ、従者は息が途絶えましたが、計画を事前に知った判官は酒を吐き出し大事に至りませんでした。横山太郎は判官主従全員が死んだものと思い、藤沢の遊行寺の裏山に捨て置きました。遊行寺の住職に観世音から「判官主従を救え」というお告げがあり、弟子たちを使わせてみると、10人の従者は全員息絶えていましたが、ただ一人温もりのあった小栗判官だけが助け出され、一命をとりとめました。

一方の照手姫は、追われる身となり、六浦まで逃げ延びましたが横山の追っ手に捕えられ、川の千光寺の前の「油堤」という土手から川の中へ投げ込まれました。照乳母の侍従が手姫を探しましたが、溺れ死んで行方知らずになったという噂に悲しみ、姫の化粧道具を堤に残して光傳寺の前の川に身を投げました。この逸話が侍従川の名前の由来です。

姫は、日頃から深く信仰していた観音経を一心に唱えたところ渦から逃れることができ、奇跡的に野島の漁師に助けられました。あまりにも美しい姫を見た漁師の妻が嫉妬して、姫小島の青松葉で燻し殺されかけました。ここでも観音経を一心に念じ、無事難を逃れましたが美濃国の遊女に売られてしまいました。燻し松は、金沢八景の瀬戸橋の北側の姫小島にあった松です。その後、小栗判官の病も癒え、遊行寺のある藤沢に戻り横山太郎を討ち、謀反の嫌疑も晴れ、ようやく美濃国で照手姫を探しあてました。念願かなって照手姫を妻に迎え、幸せに暮らしたという伝説です。(伝・相模風土記)